

曲目解説 ジョン・フィールド (1782-1837)

ジョン・フィールドはショパンに先立って夜想曲（ノクターン）という形式を創始した作曲家として（一部の人には）知られています。

1782年 アイルランドのダブリン生まれ

1793年 ロンドンに移住、クレメンティの下で学ぶ

（クレメンティはピアノ練習用のソナチネで有名ですね。）

1799年 ピアノ協奏曲第1番を発表

1802年 ヨーロッパを演奏旅行 サンクトペテルブルグ（ロシア）に移動

1821年 モスクワに移住

1832年 フランス、ベルギー、スイス、イタリアへ演奏旅行

1837年 モスクワで亡くなる

というように、当時は各地で名声をはせたピアニスト兼作曲家だったようです。

◎夜想曲（ノクターン Nocturne）とは

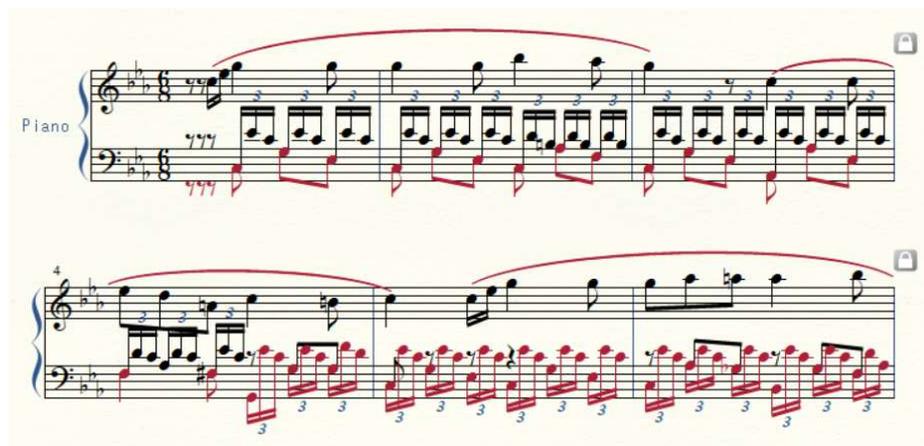
19世紀初めにピアノが改良されてペダルの仕組みが装備されて、音を滑らかにつなげることが容易になりました。それにより一つの和音を、オクターブの範囲を超えて分散して弾くアルペジオを左手部分に取り入れたものが「ノクターン」の伴奏型となりました。それに、歌うような右手の旋律を載せて、「夜に想う」という夢見心地の「ノクターン」という音楽ができました。

◎夜想曲の番号は出版社が付けたものなので、出版社によって異なります。そこでセシル・ホプキンソンが1961年のカタログで出版年順に整理したのがH番号です。

●シチリアーノ H28

1817年に初演されたピアノ協奏曲第4番の第2楽章が1819年にピアノ独奏用の「シチリアーノ」として出版されています。

●夜想曲 ハ短調（第2番に相当） H25（1817年） 冒頭部分の楽譜です。



●第7番 ハ長調 H45（1821年頃） モデラート 3/4拍子

●第8番 ホ短調 H46（1821年）

●第12番 ト長調 H58（1834年） レント 6/8拍子 全曲で24小節のみ

●第13番 ニ短調 H59（1834年） レント 3/4拍子

●第14番 ハ長調 H60（1836年） モルト・モデラート 4/4拍子

曲目解説 フレデリック・ショパン (1810-1849)

ショパンとフィールドの関係

フィールドの夜想曲が出版されたのは1812年から1836年、
ショパンの夜想曲が作曲されたのは1830年から1846年なので
ショパンがフィールドから受けている影響は大きいわけです。

- 1823年 ショパンがフィールドのピアノ協奏曲第5番をワルシャワで演奏
- 1832年 ショパンがフィールドと知り合う(??不確かな情報)
- 1833年 パリで“ショパンはフィールドの後継者”と言われましたが、この後、
ショパンとフィールドが親交を持った記録はありません。

ショパン自身はフィールドのことを作曲家／ピアニストとして非常に高く評価しており、「フィールドと並び賞されるなんて、僕は嬉しくて走り回りたい気分です」などという手紙を書いているとの記録もあります。

◎今回のプログラムを作曲年代順に並べると次のようになります。

- スケルツォ 第2番 変ロ短調 作品31 (1837)
スケルツォは全4曲
- ポロネーズ ハ短調 作品40-2 (1839)
ポロネーズの通し番号では第4番 (全16曲)
- マズルカ 嬰ハ短調 作品41-4 (1839) (出版社によっては41-1)
マズルカの通し番号では第29番 (全58曲)
- バラード 第3番 変イ長調 作品47 (1841) (バラードの日本語訳は 譚詩)
バラードは全4曲
- 夜想曲 ハ短調 作品48-1 (1841)
夜想曲の通し番号では第13番 (全18曲) 円熟期の作で、全夜想曲中、最も壮大
- 夜想曲 嬰へ短調 作品48-2 (1841)
夜想曲の通し番号では第14番

◎ポロネーズとマズルカの違い ともに3/4拍子のポーランドの舞曲ですが、

マズルカ 農民の踊り
テンポもいろいろあり、リズムの取り方もいろいろ存在する
例 ドリーブ バレー組曲「コッペリア」 第2曲
ハチャトリアン バレー組曲「仮面舞踏会」 第3曲

ポロネーズ 貴族の踊り
形式がほぼ一定で、テンポの違いもあまりない、ゆっくりの舞曲
例 バッハ 管弦楽組曲第2番 第5曲 (大変ゆっくりです)